様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：１７６０１
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１３０６５

研究課題名（和文）情報焦点移動と強調：英語の主文現象からの提言

研究課題名（英文）Information Focus Movement and Emphasis: In View of Main Clause Phenomena in English

研究代表者
本多　正敏（Honda, Masatoshi）

宮崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：２０５５４８２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究プロジェクトでは、英語の語順交替を伴う主文現象及び名詞句内の語順交替現象を考察対象として、ロマンス諸語の焦点移動現象の観察に基づいて提案されている「焦点移動は対比的焦点移動と非対比的焦点移動の2種類に分かれる」という新仮説（Cruschina (2011)）の検証に取り組んだ。具体的には、極性焦点移動現象（否定倒置文とso倒置文）、述部倒置文、直示倒置文、引用句倒置文、2項名詞句等の現象の統語的・意味的振る舞いを考察し、英語における非対比的焦点移動の存在を経験的に裏付ける証拠と議論を提出した。以上の成果は、話し手と聞き手の間の情報交換を円滑にするための言語手段の解明に寄与するものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
Cruschina (2011)は、ロマンス諸語の焦点移動現象の観察に基づき、「焦点移動は対比的焦点移動と非対比的焦点移動の2種類に分かれる」という新仮説を提唱していたが、他言語から当該仮説を支持する経験的証拠は十分に提出されていなかった。本研究プロジェクトでは、極性焦点移動現象（否定倒置文とso倒置文）、述部倒置文、直示倒置文、引用句倒置文、2項名詞句を主な考察対象とし、非対比的焦点移動の存在を裏付ける独立した証拠を提出した。本プロジェクトは、Cruschinaを中心とする統語と焦点の写像関係を扱った理論の妥当性を支持するとともに、新たな言語事実を発掘した点で現象記述面での貢献にも寄与した。

研究成果の概要（英文）：On the basis of his observations on focus-related linguistic phenomena in Romance languages, Cruschina (2011) proposed a new hypothesis that focus movement is divided into two types: contrastive focus movement and non-contrastive focus movement. By exploring the syntactic and information-structural semantic properties of the following focus-related linguistic phenomena in English, this research project aimed to provide additional support on Cruschina's hypothesis with the emphasis of research on the latter type of focus movement: polarity-related inversion sentences (i.e. negative inversion and so-inversion), quotative inversion, and binominal NPs. The empirical findings of this research project demonstrated that these linguistic phenomena syntactically realize non-contrastive focus by means of fronting operations.

研究分野：生成統語論

キーワード：生成統語論　対照言語学　対比的／非対比的焦点　極度性（extremeness）　極性焦点（polarity focus）　直示倒置（deictic inv.）　引用句倒置（quotative inv.）　二項名詞句（binoninal NPs）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

従来の生成文法理論（殊に、GB 理論）において、文の構造は、移動要素の情報構造上の意味を表示する領域（CP）、格付与・屈折・時制を扱う領域（IP）、項構造と意味役割の構造的表示を扱う領域（*v*P/VP）の 3 つから成ると想定されてきた。この枠組みの下では、焦点移動 (e.g. JOHN, I met (, not Bill).) は，CP 領域への移動操作の一種とみなされ、文頭の焦点要素は、先行文脈で提示された情報を訂正する機能を持つ対比焦点を担うと分析されてきた。近年の研究 (e.g., Rizzi (1997)) では、CP 領域を、情報構造上の意味（例：話題や焦点）を表示する複数の文法階層に分割する仮説が提案されている（以下、Split CP 仮説）。Cruschina (2011)は、ロマンス諸語の焦点関連現象の仮説に基づいて Split CP 仮説を発展させ、CP 領域には対比焦点と非対比的焦点を表示する文法階層がそれぞれ独立して存在すると仮定（以下、焦点の重層性仮説）している。本研究は、Cruschina の仮説に基づいて英語の語順交替現象を考察し、当該仮説を支持する経験的な証拠を探ることを主眼とするものである。

焦点の重層性仮説に関わる学術背景として、①～③の研究が挙げられる。①は Rizzi (1997)の Split CP 仮説を対比的／非対比的焦点移動の区別を踏まえて発展させた研究であり、②は当該仮説をドイツ語の不変化詞前置現象に応用したものである。③は応募者の研究であり、焦点の重層性仮説を英語の不変化詞前置現象に応用し、英語から Cruschina (2011)の仮説（①）を支持する経験的証拠を提示している。

① Cruschina, Silvio (2011) *Discourse-Related Features and Functional Projections*, OUP, Oxford.

当該研究の経験的事実観察に関する貢献としては、ロマンス諸語の焦点関連現象の観察に基づき、情報訂正機能を担う対比焦点移動現象に加えて、非対比的焦点移動（情報焦点移動）現象の存在を新たに指摘した点が挙げられる。理論的貢献としては、Split CP 仮説を拡張し、焦点の重層性仮説を提案することにより、2 種類の焦点移動現象の存在を理論的に説明する基盤を構築した点が挙げられる。また、焦点の重層性仮説の下、対比焦点移動と情報焦点移動の統語的特性の違いや情報構造と関わる意味の違いを指摘し、その理論的説明を試みている点が高く評価されている。一方、ロマンス諸語以外の言語から情報焦点移動の存在を支持する証拠が得られるか、また、当該移動における強調の性質は何かという 2 つの問いが未解決のまま残されている。

② Trotzke, Andreas and Stefano Quaglia (2016) “Particle Topicalization and German Clause Structure,” *Journal of Comparative German Linguistics* 19, 109-141.

当該研究は、①の焦点の重層性仮説を踏まえ、情報焦点移動の存在が（ある特定のタイプの）ドイツ語の不変化詞前置現象によって、さらに経験的に支持されることを論じた。また、情報焦点移動における強調には Morzycki (2012) が提案する語彙的極度性が関連することを新たに指摘し、語彙的極度性を持つ不変化詞が移動する場合、情報焦点移動タイプの不変化詞前置現象が容認されることを示した。語彙的極度性は、概略、想定外の値に言及する概念であり、その特性の一つとして、語彙的極度性を持つ表現同士でのみ修飾・被修飾の関係性が許される点が挙げられる (例：absolutely huge vs. ?? absolutely big)。

③ Honda, Masatoshi (2018) “Particle Fronting and Expressivity: A Reconsideration from the Perspective of Emphatic Information Focus Fronting,” *Data Science in Collaboration*, Vol. 2, pp. 50-61, University of Tsukuba.

焦点の重層性仮説に基づく語順交替現象の考察の多くは、ドイツ語など限られた一部の言語を除いて、ロマンス諸語を対象とするものである。このような研究背景も踏まえ、当該研究では、②のアプローチを英語の不変化詞前置現象 (e.g., Out gushed my secrets!) に拡張し、当該現象も情報焦点移動の存在を経験的に支持することを議論した。

２．研究の目的

焦点の重層性仮説は提案されてから日が浅く、当該仮説の経験的検証は主にロマンス諸語に限られているのが現状である。そこで生じるのが、[1]の問いである。また、英語の左方移動（例：話題化、対比焦点移動）の研究が進捗している反面、情報焦点移動に課される統語的・意味的制約を明らかにする研究は本格的に行われていないため、[2]の問いが生じる。

[1] 英語の語順交替を伴う主文現象（上記③の不変化詞前置現象を除く）から、焦点の重層性仮説（非対比的焦点移動の存在）を経験的に支持するさらなる証拠は得られるか。

[2] 非対比的焦点移動にはどのような意味的制約が課されているのか、また、その意味的制約と情報焦点移動における強調（意外性）はどのように関連しているのか。

本研究プロジェクトでは上記の問い[1]に焦点を当てて、言語現象の考察に取り組んだ。

３．研究の方法

本研究プロジェクトは、以下に示す 4 年間の基本計画の下で実施した（コロナウイルスの感染拡大及び所属研究機関の変更に伴って、研究計画にいくつか変更点が生じている）。

【1 年目】事例研究 1：Preposing around Be

1 年目は、英語の主文現象の内、Preposing around Be（例：Playing first base is John.）を主な事例として取り上げ、当該現象に関する重要文献を渉猟しつつ、先行研究で明らかになっている基本的事実を整理した上で、上記[1]・[2] の問いに取り組んだ。具体的には、Honda (2018) の研究で行った手法が参考にした。Honda では、英語母語話者の容認性判断に基づき、英語の不変化詞前置現象 (e.g. Out gushed my secrets.) には、文全体が情報焦点（Guess what! に続いて導入される文としての発話可能性）となる非対比的焦点移動タイプが存在すること、そして、語彙的極度性がその容認性を決定する要因であること明らかにしていた。そして、これらの手法を踏まえさながら、1 年目は、英語母語話者から得られる容認性判断データを用いて、英語の Preposing around Be が非対比的焦点移動によって派生する可能性を検証した。また、名詞句内での非対比的焦点移動の可能性を探るべく、二項名詞句（例：an idiot of a man）を考察するとともに、名詞句内で表される段階性（Gradability）の性質を整理するための基礎研究にも取り組んだ。

【2 年目】事例研究 2：否定倒置文（Negative Inversion）と so 倒置文（So-Inversion）

2 年目は、コロナウイルスの感染拡大と所属研究機関の変更に伴い、研究計画と研究手法を大幅に変更しなければならなくなったため、英語母語話者の容認性判断調査に基づく研究から COCA を中心としたコーパス研究に切り替えつつ、非対比的焦点移動の観点から、否定倒置文（Negative Inversion）と so 倒置文（So-Inversion）の統語的・意味的特性を考察した。

【3 年目】事例研究 3：場所句倒置文

3 年目は、前年度の研究成果を発展させるべく、*so* (*too*) 倒置文の考察を継続しつつ、場所句倒置文（例：Here is your lunch box.) を主要事例として考察した。先行研究において、場所句前置文は話し手の驚きを表す意味・機能があるという指摘に加えて（Emonds (1976)）、文頭の前置詞句を含む文全体が情報焦点として振る舞うという指摘があった（福地 (1985)）。これらの指摘を手がかりとしながら、場所句倒置文の内、直示倒置文に焦点を当て、非対比的焦点移動による派生の可能性を検討した。また、関連現象として、引用句倒置文（例："I am so happy," said Bill.）も考察対象とした。

【4 年目】関連現象の考察

1 年目から 3 年目の研究を通して、当初予定していた事例研究をほぼ終えることができたが、その理論的統合を目指す上で、より広範な事例研究と言語現象の記述を要することが判明した。この点を踏まえ、最終年度は、so ... that 文の統語的・意味的特性を考察し、so が形容詞や副詞と共起して前置する事例の分析に向けての基礎研究に取り組んだ。

また、本研究プロジェクトの成果を英語教育に結び付けるための予備的研究として、中学校英語検定教科書における情報構造の取り扱いに焦点を当てた研究に取り組んだ。

４．研究成果

本研究プロジェクトの目的は、ロマンス諸語の焦点移動研究において提唱されている「焦点移動には、対比焦点移動と非対比的焦点移動（情報焦点移動）の 2 種類が存在する」という新仮説を英語の主文現象に拡張し、非対比的焦点移動の存在を支持する独立した経験的証拠を探るものであった。非対比的焦点移動の性質は、ロマンス諸語やドイツ語を中心として研究が進められていたが、英語からその存在を裏付ける証拠を提示しようとする試みは十分に進められていなかった。以上の研究背景を踏まえ、本研究プロジェクトでは、極性焦点移動現象（否定倒置文と so 倒置文）、述部倒置文、直示倒置文、引用句倒置文、2 項名詞句を主要な考察対象として取り上げた。

1 年目は、非対比的焦点移動との関連性を探るべく、Preposing around Be と二項名詞句（Binominal NPs）を考察し、その研究成果を学会発表及び論文を通して公表した。まず、Preposing around Be については、現在分詞句が文頭に移動する事例（例：Playing first base is John.）を考察対象として、その統語的・意味的特性を考察した。その結果、当該現象は、話し手の眼前で起きた状況を聞き手に生き生きと描写する提示機能に加えて、非対比的強調（予測不可能性）を担うことを論じた。そして、当該現象の提示機能を保障する文法システムを提案した。また、現在分詞句が文頭に移動するタイプの Preposing around Be が提示機能を持つことを踏まえ、文頭の現在分詞句は話題要素や対比的焦点移動要素ではなく、非対比的焦点要素である可能性を示唆した。次に、名詞句内における非対比的焦点移動の可能性を探るべく、二項名詞句（例：an idiot of a man）の統語的特性と意味的特性を考察し、当該現象は極度性（概略、想定外の値への言及）を担うことを示した。そして、先行研究を踏まえ、極度性を名詞句内の移動操作によって保障する文法システムを提案した。また、二項名詞句における極度性の位置付けを明らかにするため、形容詞名詞句において観察される段階性（Gradability）の性質を整理するための基礎研究を行った。その結果、二項名詞句の極度性及び名詞句において観察される段階性は、無次元形容詞（Non-dimensional Adjectives）の段階性と類似していることを示した。

2 年目は、否定倒置文（Negative Inversion）と so 倒置文（So-Inversion）を考察対象として取り上げ、非対比的焦点移動との関連性を視野に入れながら、これらの言語現象の統語的・意味的特性を考察し、その研究成果を学会発表及び論文を通して公表した。まず、否定倒置文（例：Never has Bill lied.）に関する研究では、文頭に移動した否定要素が対比焦点要素とは異なる統語的・意味的振る舞いを示す点を示しながら、当該現象には命題内容の真価を強調する Verum Focus（従来から極性焦点としても知られる概念）が関与することを主張した。そして、否定要素の文頭への移動操作と助動詞倒置の操作の組み合わせによって、Verum Focus が保障される統語的メカニズムを提案した。次に、so 倒置文（例：So does Bill.）の研究では、先行研究に基づいて当該現象には肯定極性の強調が関与することを踏まえながら、累加焦点解釈がどのように保障されているかを考察した。先行研究では、so 倒置文の文頭の so と累加焦点詞 too が共起する事実が既に観察されている。この観察を踏まえ、COCA を用いたコーパス調査とインフォーマント調査を実施し、文頭の so と共起しうる累加焦点詞の性質を考察した。その結果、文頭の so は、too 以外にも、also 及び even と共起できることが明らかになった。最後に、否定倒置文と so 倒置文が持つ極性値の強調効果を Verum Focus に帰するとともに、移動操作を通して Verum Focus を保障する、より包括的な文法メカニズムを提案した。

3 年目は、当初の研究計画を変更し、so too 倒置文、場所句倒置文、そして、引用句倒置文を事例として取り上げ、これらの文の形式と情報構造の対応関係を考察し、その成果を研究論文として公表した。まず、文頭の so が累加焦点詞 too を伴う、*so too* 倒置文（例：So too can Mary.）に関しては、COCA を活用したコーパス分析に基づき、当該形式の情報構造上の特性を考察した。その結果、*so too* 倒置文において、①動詞句の省略を伴う場合、累加焦点の対象は倒置助動詞の後に生起する名詞句（代名詞ではなく、固有名詞や一定の情報量を持つ普通名詞を伴う名詞句）になる点、そして、②動詞句の省略を伴わない場合（例：So too can Mary play the piano.）、累加焦点の対象は動詞句内の文法要素になる点、の 2 つが明らかになった。本研究の成果は、累加焦点詞 too を伴うか伴わないかに関わらず、*so* 倒置文は非対比的情報焦点（厳密には、極性焦点と累加焦点）を伴う言語現象であるという位置づけをさらに明確にするものである。次に、場所句倒置文の情報構造について、場所句倒置文の一種とされる直示倒置文（例：Here is your lunch box.）を取り上げて考察し、当該現象の一部の事例に関しては、文頭の直示的副詞が非対比的情報焦点機能を担いうる可能性を論じた。また、引用句倒置文（例："I am so happy," said Bill.）における文頭の引用句は新情報を担うという先行研究の指摘（例：松原(2019)）を踏まえ、当該現象も非対比的情報焦点移動によって派生される可能性を論じた。

最終年度は、so...that 文の統語的・意味的特性を取り上げた研究と中学校英語検定教科書における情報構造の取り扱いに焦点を当てた研究に取り組み、それらの成果を研究論文として公表した。まず、so...that 文の研究に関して、*so* 倒置文（例：So do I.）には非対比的焦点移動（肯定極性焦点移動）が関与するという昨年度の研究成果を踏まえ、程度強調詞 so が形容詞や副詞に付加して倒置を引き起こす事例（例：So rough was the sea that this ship couldn't enter harbor.）の考察に向けた予備的研究を実施した。具体的には、文頭への移動を伴わない so...that 文の統語的・意味的特性を考察し、程度強調詞 so には数量詞繰り上げに準じる LF 移動が適用されるという先行研究の議論を踏まえ、so...that 節が動詞句領域内で構成素を成す場合と文レベルで構成素を成す場合があることを明らかにした。この成果を踏まえ、今後の研究プロジェクトを通して、文頭への倒置を伴う so...that 文が非対比的焦点移動によって派生される可能性を検証したい。また、本研究プロジェクトを通して、英語の語順交替現象から非対比的焦点移動の存在を裏付ける証拠を提出してきたが、それらを統合した研究を進める上で、極性焦点の統語的具現化とその位置付けについて独立した考察が必要であることが判明したため、今後の研究に譲りたい。次に、中学校英語検定教科書における情報構造の取り扱いに焦点を当てた研究に関して、本プロジェクトの研究成果を英語教育に応用するための予備的研究として、与格交替（例：“I gave a book to Mary.” ⇔ “I gave Mary a book.”）を事例として取り上げ、中学校英語検定教科書における情報構造の取り扱いの特徴と指導上の留意点を考察した。その結果、現行の中学校英語検定教科書を使用しながらこれらの構文の使い分けを指導する際、与格構文を基底とする *wh* 疑問文とその回答のパターンが複雑になる点に留意する必要性があることを論じた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Masatoshi Honda	４．巻 41
２．論文標題 A Corpus-Based Analysis of the Semantic Function of the Complex Operator So Too in So-Inversion	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Tsukuba English Studies	６．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Masatoshi HONDA	４．巻 100
２．論文標題 Notes on Deictic Inversion and Quotative Inversion in English	５．発行年 2023年
３．雑誌名 宮崎大学教育学部紀要	６．最初と最後の頁 21-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Masatoshi Honda	４．巻 267
２．論文標題 The Syntax and Information-Structural Semantics of Negative Inversion in English and Their Implications for the Theory of Focus	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Current Issues in Syntactic Cartography: A Crosslinguistic Perspective (Linguistik Aktuell/Linguistics Today)	６．最初と最後の頁 27-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/la.267.03hon	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Masatoshi Honda	４．巻 40
２．論文標題 On the Syntax and Information Structure of Polarity Inversion in English: A Reconsideration from the Viewpoint of Additive Focus	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Tsukuba English Studies	６．最初と最後の頁 231-252
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Masatoshi Honda	4．巻 5
2．論文標題 A Note on the Syntax and Semantics of Additive Focus in So-Inversion	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Data Science in Collaboration (DaSiC) Volume 5	6．最初と最後の頁 154-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Masatoshi Honda	4．巻 4
2．論文標題 A Reconsideration of Gradability in the Nominal Domain	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Data Science in Collaboration (DaSiC) Volume 4	6．最初と最後の頁 17-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Masatoshi Honda	4．巻 27
2．論文標題 Clause Typing and Presentationals: Further Evidence from Participle Preposing in English	5．発行年 2021年
3．雑誌名 神田外語大学大学院紀要　言語科学研究第27号　長谷川信子先生退任記念号	6．最初と最後の頁 125-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Masatoshi Honda	4．巻 38
2．論文標題 The Role of Extremeness in English Binominal NPs and Its Theoretical Implications	5．発行年 2021年
3．雑誌名 JELS (Papers from the Thirty-Eighth Conference November 7-8, 2020 and from the Thirteenth International Spring Forum of The English Linguistic Society of Japan)	6．最初と最後の頁 16-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Masatoshi Honda
２．発表標題 A Note on the Syntax and Semantics of Additive Focus in So-Inversion
３．学会等名 Tsukuba Global Science Week 2021/Data Science in Collaboration (DaSiC) 2021（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 本多正敏
２．発表標題 英語の 2 項名詞句における極度性の役割とその理論的示唆
３．学会等名 日本英語学会第 38 回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Masatoshi Honda
２．発表標題 A Reconsideration of Gradability in the Nominal Domain
３．学会等名 Tsukuba Global Science Week 2020/Data Science in Collaboration (DaSiC) 2020（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関